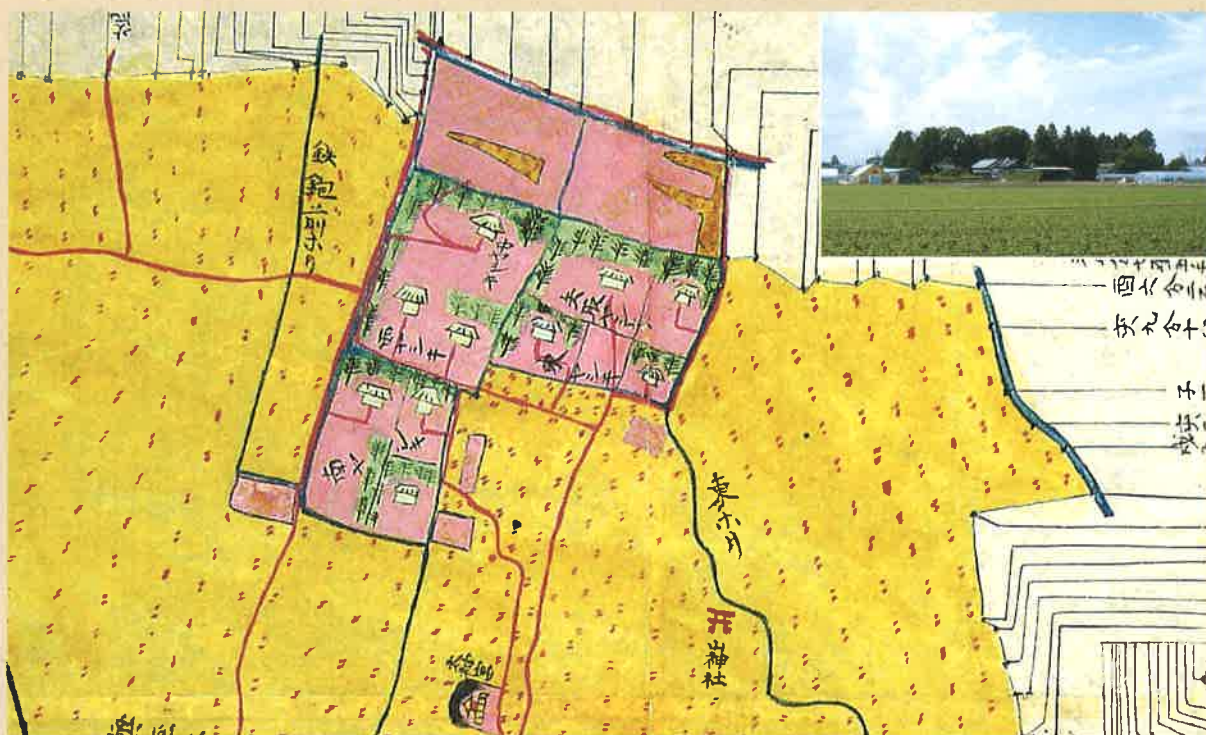




市史通信

第18号

仙台市博物館
市史編さん室



「宮城郡国分長喜城村絵図」(部分) 宮城県公文書館所蔵 イグネのようすが記号的に描かれている 右上:若林区長喜城に残るイグネ

せんだい 今昔 イグネと仙台藩

“イグネ(居久根)”。屋敷の周りを取り囲む林のことをそう称することは、テレビで放映された若林区長喜城の旧家を取り上げたドキュメンタリーや泉根白石を舞台にしたドラマでよく知られるようになりました。開発などにより少しずつ姿を消してはいますが、それでも郊外の農村地帯に足を向けると、稲田の中に島のように点在するイグネを目にすることができます。

こうしたイグネは、いつ頃から農村風景の重要な要素となったのでしょうか? 残念ながらハッキリとしたことは分かりませんが、江戸時代に仙台藩が推進した植林政策が大きなきっかけとなったことは確実です。森林や樹木の資源性を大きく評価した仙台藩は、江戸時代を通じて熱心に植樹を進め、伐採を厳しく制限し、森林保護に取り組みました。すでに初代藩主伊達政宗の時に、数度にわたり桑や漆、楮といった有用樹木の植樹を奨励するお触れを出しています。また政宗の側近が残した記録『木村宇右衛門覚書』には、政宗が仙台周辺に数多くの杉を植林させたと書き記されています。仙台藩領の海岸沿いに広がる松林も、政宗の時代

に紀州から種を取り寄せて育成されたものという伝えが残っています。これは確実な資料では確認できるものではありませんが、森林育成に熱心であった政宗に仮託された伝説なのかもしれません。

屋敷周りのイグネも、こうした藩の森林育成政策のなかで形成されてきたものと思われます。イグネは風雨から家を守り、落ち葉や下枝は燃料や肥料となるなど、人々の生活に大きな恩恵を与えることになりました。しかし、一度植えられた樹木の伐採は藩から厳しく制限され、たとえ屋敷の持ち主でも自由にすることはできませんでした。一見すると過剰なまでに厳しい保護政策によって、イグネの樹木は仙台藩領の農村に定着し、大きく枝葉を伸ばしたと言えるでしょう。

江戸時代後期に作成された長喜城(若林区)の村絵図には、屋敷を取り囲むイグネがしっかりと描かれています。こうした様子は、同じころに作られた他村の絵図でも一般的に見ることが出来ます。江戸時代後期、仙台藩領の農村の生活にイグネが欠かせないものとなっていたことがうかがえます。だからこそ、明治維新後、藩の規制が無くなった後も農村の人々はイグネを守り続け、イグネとともに生活することを選んだのではないのでしょうか。

『資料編 伊達政宗文書』

シリーズ完結!!!

伊達政宗の生涯を手紙などの文書でたどる『資料編 伊達政宗文書』全4巻がこのたび完結しました。掲載した資料は4049点、うち1530点は写真も紹介しています。この時代の大名としては例を見ないほど多くの文書を残した政宗。これらの文書からわかる政宗の意外な一面をご紹介します。

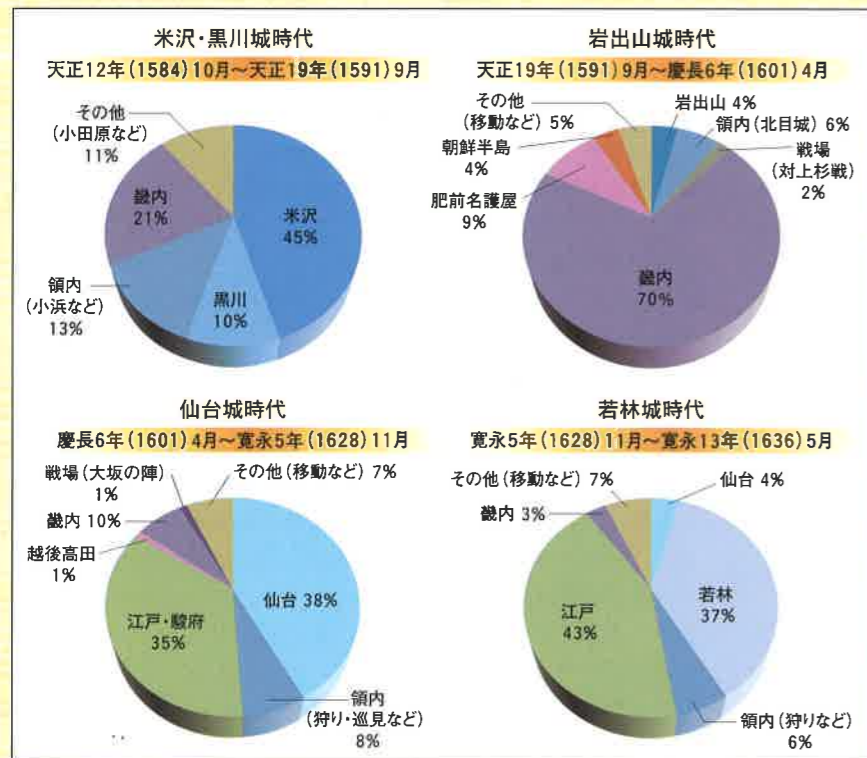
政宗はどこにいた？

伊達政宗といえば東北の大名。ですが、記録類で彼の足跡をたどると、東北で過ごした時間は意外と少ないことがわかります。

24歳まで南奥の戦場を奔走した政宗は、天正18年(1590)5月の小田原参陣で、初めて東北の外へ足を踏み出します。その後約10年間は岩出山城を居城としますが、ここに実際に住んだのは長くても8カ月ほどでした。仙台城を居城としてからは領国に居る割合も増えますが、江戸や、京都・大坂など畿内に過ごした時間も大きい割合を占めています。若林城移転後もこの傾向は変わらず、江戸と畿内に居た時間は仙台城時代とほぼ同じ割合を占めています。

結局、政宗は家督相続後の人生の6割近くの時間を領国の外で過ごしました。そのための移動に費やした時間の合計は、ざっと見積もって約3年です。彼が戦場に臨んだ時間の合計もほぼ3年で*、政宗は戦陣に枕したのとほぼ同じ時間、旅枕にあったのです。

*居城から各方面の合戦を指揮していた時間は除いています。



伊達政宗甲冑像 瑞巖寺所蔵

狩りの獲物と人々との親交

政宗は若いころから大の鷹狩り(鷹野)好きでした。「鷹狩りへ行きたい!!」という手紙は多く、時には徳川家康の鷹場へ忍び込んだこともあり。晩年には、国許での狩りが、江戸での気詰まりを晴らす時間にもなったようです。鷹狩りは身分ある武士の嗜みとされましたが、「嗜み」を超える傾倒ぶりでした。

獲物は雁・雉子・菱喰・鶴などから兎や狐とさまざまで、多い日には300羽もの鳥を捕っています。獲物の味も楽しんでおり、嫡子忠宗への手紙からは、「10月半ばの鶴は風味が劣る」(2249号)「2月半ばの雁は脂がのっていない」(2303号)など、味へのこだわりが感じられます。また、將軍や大名、息子や家臣たちへの贈答にも用いていました。一生の楽しみだった狩りの獲物は、人々と親交を深める潤滑油でもあったのです。

八月九日 政宗
 天氣悪く候て、しかじか川狐もこれ無く帰り候。ようやく雁来たり候間、鷹野つかまつるべき覚悟に候。

狩りに関して書かれた息子宗泰への手紙(1992号文書より)



政宗が高屋松庵に与えたと伝えられている薬単筒 個人蔵

政宗の病氣見立て

高屋家は仙台藩お抱えの医師で、快庵とその甥松庵が政宗に仕えました。政宗が2人に出した手紙は44通確認されていますが、そのうち約半数は、自分で使う薬を求めたものです。「白鳥を肴に強めの焼酎4、5杯を飲んだら、熱が出た」(3817号)という具合に体調が書かれていて、政宗の日常が手に取るように見えてきます。

残りの手紙のうち17通は、身近に仕える女性が使う薬を求めたものです。自分の薬をもらう時と同様、脈や発熱の状態、以前の薬の効き目まで細かく記しており、まるで薬剤師へ処方方を指示する医者のような様子。自分の健康を気遣うのはいつの時代も同じ。加えて政宗は、身近な女性の体調へも日常から気を配っていたようです。



各巻の内容

『伊達政宗文書 1』: 天正12年以前から天正19年まで(政宗25歳まで)の文書(1号~903号)
 『伊達政宗文書 2』: 文禄元年から元和元年まで(政宗26歳~49歳)の文書(904号~1879号)
 『伊達政宗文書 3』: 元和2年から寛永4年まで(政宗50歳~61歳)の文書(1880号~2956号)
 『伊達政宗文書 4』: 寛永5年から寛永13年まで(政宗62歳~70歳)の文書・既刊の補遺(2957号~3944号)

施設探訪 郡山遺跡展示室

仙台市太白区郡山一帯は、かつて東北地方を律令体制の中に取り込み、支配を進めるための役所(官衙)が置かれた、政治の一大中心地でした。7世紀中ごろに作られたI期官衙は、古代陸奥国の建国に関わった重要な城柵でした。その後、7世紀末ごろに建て替えられたII期官衙は多賀城が創建される前の陸奥国府跡と考えられており、東北地方最古の伽藍を有した寺院(郡山廃寺)を含むと、その規模は東西800m、南北900mに及びます。また、最近では、隣接する長町駅東遺跡・西台畑遺跡から、郡山遺跡の造営や運営に関わった人々のものと思われる大規模集落跡が発見されました。郡山遺跡から出土した遺物には畿内産のものや関東の影響を受けたものも多いため、古代から広く物と人が交流していたことがうかがわれます。それらの重要性が評価され、郡山遺跡は平成18年に国史跡に指定されました。

郡山遺跡展示室は仙台市文化財課郡山遺跡調査事務所に併設されたもので、昭和55年から平成18年度まで179回にわたって継続して行われている発掘調査の成果を、時代ごと・テーマごとに紹介しています。1300年前の役所の門に使われた直径60cmの柱などの豊富な出土遺物や写真パネルを見て、古代の郡山を思い描いてみませんか。



展示室のようす

郡山遺跡展示室
 〒982-0003 仙台市太白区郡山5丁目10-3 (仙台市立郡山中学校西隣)

開館時間 月曜日～金曜日(土・日・祝休) 9:00～16:30

入館料 無料

交通案内 地下鉄長町駅・JR長町駅から徒歩約20分
 JR太子堂駅から徒歩約10分

*見学希望の方は仙台市文化財課(022-214-8893)までお問い合わせください。



【真壁屋の瓦】

駅やデパートの一角ではたくさんの仙台の名産品が売られています。和菓子や笹かまぼこなどに加えて、近年では牛タンやずんだ餅といった新しい土産品が大きく売り上げを増やしているようです。そうした中で、江戸時代以来の伝統を持ち続けている数少ないものが仙台湾噌です。

仙台湾噌の起源は、江戸時代初期に常陸国真壁郡（茨城県）から仙台に移住した真壁屋市兵衛が仙台湾下国分町において製造したのが始まりとされています。真壁屋は、藩から扶持を与えられ、藩の味噌御用を勤め、川内の御塩噌蔵での味噌製造に携わりました。このほか塩問屋を命じられ、領内の塩を一手に取り扱ったといいます。江戸時代中期以降には藩の財政が逼迫する中で、しばしば藩に献金や資金融資を行い、寛政6年（1794）時点でその総額は約6千両にも及んでいます。また、藩内から産出される特産物の専売や殖産事業に関わる「国産方係」に任じられています。真壁屋はこうした功績により「諸役御免」（租税を免除されること）や「古木」の名字を名乗ることなどを許されています。

このように真壁屋=古木家は、仙台湾下を代表する豪商でしたが、同時に町役人でもありました。仙台湾下の各町には検断、肝入といった町役人が住人の中から選ばれて町政に当たっていましたが、その他に町の中で古い由緒を持つ有力な家が検断、肝入を補佐することもあり「古人」（こにん）などと呼ばれていました。古木家はこの「古人」の筆頭に位置づけられ、国分町の町政にも関わっていました。

一方、古木家は商家や町役人としてだけでなく、文化面でも仙台湾有数の家として知られていました。江戸時代中後期の当主は絵画をよくし、安永元年（1772）に仙台に滞在した土佐の

画家中山高陽は、当時真壁屋の当主であった古木市兵衛の画や所蔵する作品を見に古木家を訪れています。また仙台の画家達の絵を集めて寛政10年（1798）に出版された『優遊一奇』や、同年に仙台湾下の豪商日野屋の当主中井文寿のために開かれた書画会の記録に、「古木子方」の名で市兵衛の絵が載っています。

ここに一つの古い瓦があります。この瓦は、真壁屋の味噌蔵の屋根に葺かれていたものと伝えられているものです。真壁屋の屋敷は間口が15間（約29m※）もありました。これは仙台湾下における標準的な町屋敷（間口6間）の2.5倍分になります。真壁屋がいかに仙台を代表する有力町人だったかを知ることができるでしょう。残念ながら真壁屋の屋敷は明治以後の時代の変革の中で国分町から姿を消しましたが、江戸時代以来、味噌の香りをかぎ続けてきた味噌蔵の瓦が今に残されており、かつての面影を今に伝えてくれます。

※1間を6尺3寸として計算



真壁屋の味噌蔵に葺かれた瓦 個人蔵

仙台の歴史を完全収録 好評発売中

宮城県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで(株)宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発売元 (株)宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3 TEL 022-235-7181 FAX 022-235-7183
お問合せ先 仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉 TEL 022-225-3074

続刊予定

- ◎通史編/近代1~2・現代1~2
- ◎資料編/仙台藩の文学芸能
- ◎特別編/慶長遣欧使節



- 【通史編 1】 原始
- 【通史編 2】 古代中世
- 【通史編 3】 近世1
- 【通史編 4】 近世2
- 【通史編 5】 近世3
- 【資料編 1】 古代中世
- 【資料編 2】 近世1 藩政
- 【資料編 3】 近世2 城下町
- 【資料編 4】 近世3 村落
- 【資料編 5】 近代現代1 交通建設
- 【資料編 6】 近代現代2 産業経済
- 【資料編 7】 近代現代3 社会生活
- 【資料編 8】 近代現代4 政治・行政・財政
- 【資料編 10】 伊達政宗文書1
- 【資料編 11】 伊達政宗文書2
- 【資料編 12】 伊達政宗文書3
- 【資料編 13】 伊達政宗文書4
- 【特別編 1】 自然
- 【特別編 2】 考古資料
- 【特別編 3】 美術工芸
- 【特別編 4】 市民生活
- 【特別編 5】 板碑
- 【特別編 6】 民俗
- 【特別編 7】 城館

通史編 3,000円(本体2,858円)
資料編 4,000円(本体3,810円)
特別編 6,000円(本体5,715円)
※板碑のみ 5,000円(本体4,762円)

【通史編 1】 原始は改訂版とセット販売となります
1冊ずつお求めになれます

おねがい

市史編さん室では、仙台の歴史にかかわる資料を探しています。よりよい仙台市史を作るためにはより多くの資料が必要です。皆さまのお宅に古い文書や写真などございましたら、ぜひ編さん室までお知らせください。
TEL:022-225-3074

『通史編1 原始 旧石器時代』(改訂版)の刊行について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて改訂版を刊行しました。ご購入いただいた元版を博物館の「市史改訂版」係まで送料着払いでお送りいただくか、博物館まで直接お持ちください。お届けいただいた元版に改訂版を添えてお返しいたします。詳しくは市史編さん室までお尋ねください。